

イラン政治のうねりの中で ——深まる二国間関係、試される危機対応

在イラン大使館一等書記官

角潤一

すみ じゅんいち 一九九八年外務省入省。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院で中近東学の修士号取得。本省で中東第一課、経済安全保障課、在外でイラン、アフガニスタン、イラク、国連代表部などに勤務。二〇一九年から現職。



昨年6月にテヘランを訪問した際の安倍総理大臣。その後方が筆者（提供・イラン国営通信(IRNA)）

「ペルシヤ語族」の大移動——。昨年六月、外務省でイ

ラン・ペルシヤ語を専門とする多くの同僚たちが「第二の故郷」テヘランへ続々と乗り込んできた。言うまでもなく、

安倍総理の訪問（同月二二―四日）に備えたものである。

日本の総理大臣がイランを訪問するのは実に四一年ぶり、七九年のイスラム革命以降初めてとなる。

日本側は、このロジの要所要所にペルシヤ語のエキスパートを合計十数名配置した。その数のあまりの多さに、イラン側警護は「いったい本物の総理通訳は誰だっ？」と混乱気味に聞いてきた。「ここにはまだ居ない。最適任者が総理と一緒に飛んでくる」と応じると二度驚かれたが、「日本がこの国をどれだけ大事に考えているかの証左であ

る」と答えると、妙に納得し感動してくれた。

革命後初、四一年ぶりの首相訪問のインパクト

一二日、安倍総理を乗せた車が騎馬隊に導かれ、歓迎式典が催される緑豊かなサーダーバード宮殿の中庭へと滑り降りてくる。正装したイラン軍の儀仗兵による「君が代」が流れると、ペルシヤ語族の後輩たちは感極まっていた。一方、総理リエゾン（連絡調整役）であった筆者は、革命防衛隊による警護の目をかいくぐり、総理の次の動線へにじり寄ろうと蟹歩きを続けていた。

翌一三日、現職総理による初のイラン最高指導者との面談が実現した。イランに限らず、いきなりトップ会談がで

さるわけではない。総理訪問の前には、国連総会に合わせ
てニューヨークでの六年連続の首脳会談があり、外相レベ
ル、次官級レベルの緊密な協議、さらにその裾野には、人
権対話や軍縮・不拡散協議、経済協力、文化・スポーツの
作業部会など幅広い分野で、局長・課長級から担当官レベ
ルのつながりまで、さまざまなりとりが広がる。政府外
でも国会議長の訪日など要人の往来を積み上げてきた。も
ちろん、対話の数が多ければ良いというものではないが、
話をしなければ始まらないのも事実である。

また、誤解が多いが、「最高指導者」はイランにおける
最高権力者ではあるも、独断で全てを決めているわけでは
ない。「無謬の存在」として過ちを犯せない圧力の下、民
意・世論に目配りしつつ、国内のさまざまなアクターとの
バランスを取りながら国の舵取りを続けている。このイラ
ンの複雑な体制に対する働きかけを「穴の空いた歯磨き粉
チューブ」に例えた悪友がいた。つまり、チューブを下か
ら少しずつ巻き上げ、所要所の穴を押さえて、ようやく
最後の蓋がポンツ！と開くのだと。

この訪問の成否についての評価は外部の方々に委ねた
い。しかし、ハメネイ最高指導者が「日本の善意と真剣さ
に疑いを抱いてはいない」と日本への信頼の念を内外に示

したことは、少なくとも日・イラン関係の「前線」に立つ
者にとつて、極めて大きなインパクトがあった。われわれ
が日々向き合うイラン側との関係で大きな違いが生まれ
くる。遡れば、事前準備段階でのイラン側とのやりとりか
らも、高いレベルでの歓迎の意が汲み取れた。

イラン側にとつても、世界的な注目が集まる中、国の最
高レベルから自国の立場を表明する機会を得たことにな
る。だからこそ、最高指導者事務所は異例にも総理との面
談の動画をホームページ上にアップし、最高指導者自身の
肉声を国営放送で報じたのである。

十数年の付き合いになるイランのベテラン外交官はよく
言っていた。「苦しい時に向き合ってくれた相手のことは
忘れない」と。イラン人は、義理人情、演歌調の国民性な
のである。

八〇周年から九〇周年へ

この訪問が行われた二〇一九年は、日・イラン間の外交
関係が樹立されてから九〇周年に当たる年であった。そこ
から遡ること約一年前、本省のイラン担当から当時官房総
務課に勤務していた筆者に電話がかかってきた。私は一〇
年前に同じく本省のイラン担当であった。「前例を調べて

いるが、八〇周年より前の周年行事の記録が見つからない」という。それはそうだ。それまでイランとの間で周年行事はなかった。二〇〇九年当時、イランを取り巻く国際的な環境は厳しさを増していた。それでも伝統的に良好な二国間関係を維持しようと、テヘランに日本の公使館が開設されたのが一九二九年であることに目をつけ、末広りの「八」は縁起が良いとして、在京イラン大使館（当時の駐日大使はアラグチ現外務次官と知恵を絞った結果が「八〇周年」であった。この年、日本の外務大臣による四年ぶりのイラン訪問が実現した。

一方、九〇周年はしっかり準備されていた。目玉事業として、夏には、九〇年前に日本の初代特命全権公使が信任状を捧呈したゴレスタン宮殿（世界遺産でプロジェクショーン・マッピングを実施。一〇月には、中世にイランで失われたラスタール彩の技法を日本で復活させた陶芸家である加藤幸兵衛氏と彼に弟子入りしたイラン人女性陶芸家二名の合作によるラスタール彩陶壁が、テヘラン市内の博物館に寄贈された。これらは、奥深い両国の関係を象徴するイベントとなった。

この年の一二月、異例の早さでローハニ大統領の答礼訪問が決まる。イラン大統領の訪日は一九年ぶり。これもイ

ラン側の高い関心の現れであり、大統領リエゾンであった筆者にも調整段階からイラン側の「熱量」が感じられた。六月の総理のイラン訪問に続き、一二月のローハニ大統領の訪日で締めくくられた九〇周年は、二国間関係上の「盆と正月が一緒に来たような騒ぎ」の節目の年であった。

六月は応援出張者の立場だった筆者は、そこで里心がつき、一〇月には一五年ぶりに第二の祖国イランに再赴任していた。二〇二〇年はイラン国会選挙、米大統領選挙、そして来年二一年にはイラン大統領選挙と「政治の年」であり、イランは奇しくも世紀末（イラン暦一四〇〇年）を迎える。イラン・ウォッチャーとして、大きな政治のうねりをおぼろつき席で観られる絶好の機会だと考えていた。

ソレイマニ暗殺、風雲急を告げる年明け

「Soleimani dar Araq terror shod. (ソレイマニがイラクで殺られた)」。

年が明けて間もない一月三日未明、この短いワッツアップ (WhatsApp) メッセージで益正月気分は吹き飛んだ。旧知のイラン人ジャーナリストからの速報だった。

ハメネイ師により、激しい報復と三日間の服喪が宣言され、テヘランの瀟洒な街の雰囲気はおどろおどろしく一変

した。至る所に哀悼の横断幕や喪に服す黒旗が掲げられ、冬の寒さと相まって陰鬱を増した。六日、筆者がこれまで見たこともないほどの群衆がソレイマニの葬儀に集まった。これに対してトランプ大統領は、イランが米国を攻撃すれば、反撃として「イランの五二カ所を標的にする」とツイートした。

静かに喪が明けたと思った矢先の八日未明、イラク駐留米軍基地へイランが報復の弾道ミサイルを撃ち込み、またもや夜明け前の大使館へ走るようになった。執務室で情報収集していると、「テヘランで民間航空機が撃墜されましたっ！」と若手館員が飛び込んできた。慌ててペルシャ語報道を読むと「墜落」とある。「まあ、落ち着いて」と諭したが、数日後、彼の早とちりが実は正しかったことが判明する。革命防衛隊がウクライナ航空機の誤射を認めたのだ。乗客乗員一七六名全員が死亡する痛ましい事件となった。

これらの事件はイラン在留邦人にも動揺を与え、帰国の要望も出始めた。八日未明に大使館に対策本部を立ち上げ、館員は邦人の所在確認やフライト情報の収集に追われた。同日午後、テヘランの危険情報が四段階中のレベル1（十分注意）からレベル3（渡航中止勧告）へと一気に引き上

げられた。

長年当地で根を張る日本企業の動きは素早かった。幸い航路は完全には途絶えていなかったため、商用機での退避が可能であった。大使館は、在留邦人との情報共有の場である安全対策連絡協議会や領事メールなどで情報を共有し、この日の夜から、万一の混乱に備え、出国する邦人支援のために館員を連日空港へ派遣した。一四日夜までに、退避を希望する邦人はイラン国外へ脱出した。

一六日、邦人退避に一定の目処がつくと、筆者は同僚らと防弾車に乗り込み、明け方のテヘランを発って北上した。アルボルズ山脈を越え、カスピ海が近づくと植生が一気に緑濃くなり、湿度が増す。道中、休憩所やホテルをチェックする。道路状況は良い。緊急時に備え、平時から脱出経路を調査しておくのは定石である。われわれは、かねてからの検討の結果、アゼルバイジャンに狙いを絞っていた。

アスタラ国境を徒歩で越え、出迎えてくれた在アゼルバイジャン日本大使館員と合流し、一気に首都バクーへ向かう。途中休憩などを最小限に抑えれば、テヘランからバクーまで最短期一〇時間で走破できることがわかった。アゼルバイジャン政府は極めて協力的であり、また、日本大使館も館を挙げて支援してくれた。国境警備にも手土産を渡し、

いつでも連絡がとれる体制を整えた。「このルートは使えない」と確信し、翌一七日、空路でテヘランへとんぼ返り。イラン永住者を含むより多くの在留邦人が退避を希望する事態も想定し、大型バスの調達先も目星をつけてマニユールを整備した。もちろん、同時に空路による退避も検討していた。かつてのイラン・イラク戦争時の「プロジェクトX」であるトルコ航空を始め、チャーター機の可能性も追求した。

その後、米・イラン間の緊張は徐々に一定の落ち着きを見せ始めた。日・イラン間の良好な関係を維持する上で、ビジネスマンや報道関係者、日本人学校や研究者、留学生などの在留邦人の存在は極めて重要であり、二国間関係の基礎となるものである。そして、その安全の確保は大使館の最重要任務の一つである。

大使館からは、テヘランの現状、ソレイマニの死から四〇日後（アルバイーン）に当たる日がイスラム革命記念日（二月一日）と重なる点に注目し、それが今後の情勢を見極める一つの目安となるとの見方、それに続く国会選挙（二月一九日）やイラン正月（三月二日）、ラマダン（断食月）などの流れを説明し、また万一の際の陸路退避ルートなど、邦人が個々に情勢を判断するためのベースとなる

情報を提供し続けた。一月末には、多くの邦人企業関係者が退避していたドバイにも飛び、説明会を実施した。

二月二日、危険情報レベルが一段階下がり、レベル2（不要不急の渡航中止）となったこともあり、一時退避していた在留邦人が少しずつイランに戻ってきた。

新型コロナウイルス感染症の蔓延

二月一八日、筆者は再びバクーへ飛び、緊急時の退避計画について詰めの協議を行い、翌一九日にはテヘランへ帰任した。同じ日、イランで初の新型コロナウイルス感染症例二名が報告され、一〇時間後には二名死亡の速報が流れた。その約一週間後、コロナに関する記者会見で、咳き込み額の汗をしきりに拭っていた厚生省次官のコロナ陽性が発覚、その後も副大統領や国会議長にまで感染が広がり、国内に衝撃が走った。

映画館などの娯楽施設は閉鎖され、学校も全土で閉校、ほとんどの社会・経済的活動が事実上一時停止し、制裁で疲弊した経済に追い打ちをかけた。ソレイマニ司令官追悼の看板があつたという間にソーシャルディスタンスやマスク着用を呼びかけるものにすげ替えられた。イラン人の変わり身の早さにはいつも驚かされる。

二六日、今度は感染症に関する危険情報が、イラン全土がレベル2へ、二八日にはテヘランなどが武漢と同じレベル3へと引き上げられた。あまり知られていないが、コロナ感染者数が一人を超えたのは(中国、イタリアに次いで)イランが世界三番目であり、我が国の公館所在地で感染症危険レベル3となったのは、テヘランが最初だった。

なぜイランでこれほど早く感染が広がったのか。イラン人はもともとパーティー好きで、男性同士でも挨拶の際に頬をすり合わせる「濃厚接触」民族。密を避けるににくい宗教行事も多い。また、制裁の影響で西側とのビジネスが停滞する中、イランは中国との結びつきを深めている。当地外交団の一人は、「これが現代版シルクロード『二帯一路』の功罪。良いモノも悪いモノも運んでくる」と指摘していた。

在留邦人は再び退避の検討を始めた。この頃、「国境が閉鎖された」とアスタラ国境の担当官が申し訳なさそうに連絡してきた。アゼルバイジャンに限らず、この地域で最初に感染が拡大したイランに対し、周辺国はいち早く国境を封鎖した。もともと選択肢が少ない空路も、米国の経済制裁や先のウクライナ航空機撃墜、そして刻々と世界に広がるコロナ禍の影響で、退避ルートは狭まっていった。

当館も直ちに対応に迫られた。イラン国内の感染状況、

病院の体制、政府の対応、航空便や周辺国の動きを調査。安全対策連絡協議会を累次開催し、領事メールによる情報提供も連日続いた。そして、三月中旬までに、退避を希望する在留邦人は空路を使ってイランから出国した。同時に、イラン国民向けには、国際機関経由でのコロナ対策の経済協力を実施した。苦しいときこそその支援である。

九月九日現在、イランは一日の新規感染者が三三三三人、死者が一三七人(総感染者数は三九万三四二五人)と、「第二波」のただ中にあり、まだまだ収束は見えない。このようなか、二国間関係の基礎となる在留邦人に対し、大使館は、当地の医療事情や感染予防対策など、帰還の是非の判断に必要な情報収集・提供を続けている。一方で、イランをめぐる情勢は動き続けている。ハメネイ師は、一月の弾道ミサイル攻撃を「平手打ちの一撃」と称し、激しい報復はまだ終わっていないことを匂わせている。国内では、六月末から七月にかけて、核施設の爆発など不審な事件が相次いだ。一月の米大統領選挙を睨み、米・イラン両国の駆け引きも続いている。

これが、私の持ち場であるイランという「前線」での約一年間の出来事である。世界中で奮闘する同僚らと共に、前線で球際に強いプレイヤーの一人でありたいと思う。●